

『蒙古字韻』篆字母の実用例

—微母字について—

吉池孝一

一

『蒙古字韻』は、パスパ文字の篆字を集めて「篆字母」として巻頭に収める。この『蒙古字韻』の篆字母と、実際に印章や碑額で使用されたパスパ文字の篆字を表にまとめたものに照那斯圖(1980)の「八思巴字篆体字母研究」がある。これは1980年までに見ることのできた資料による成果でありこの分野の唯一の研究であるが、『蒙古字韻』にあるけれども対応する実用例を挙げないというものもある。本稿は、そのようなものの内、実用例と見なしうるものを追加しようとするものである。

二

照那斯圖(1980)は『蒙古字韻』篆字母の微母字(図4参照)と同形の実用例を挙げない。しかしながら、1997年に出版された『常熟博物館蔵印集』中28頁のパスパ文字の官印(図2参照。左から第2行第4字目)に同形の微母字を見出すことができる(図6参照)。もつとも。この官印の印影は、すでに羅振玉(1916)『隋唐以来官印集存』に収められており(図1参照)、照那斯圖(1977)は「元八思巴字篆書官印輯存」において、羅振玉(1916)の印影を利用して「湖陽等處武勇義兵百戸印」と読んでいる。しかしながら、『隋唐以来官印集存』に収められた印影の「武」の声母即ち微母字の部分が不鮮明であった(図5参照)。不鮮明であったため、照那斯圖(1980)の「八思巴字篆体字母研究」に、この微母字の部分を利用することができなかったのである。

三

この官印の実物は常熟博物館に所蔵されていた。博物館は新たに鮮明な印影を採り『常熟博物館蔵印集』に掲載し1997年に出版した。それによると『蒙古字韻』の微母字(図4参照)と同じものと見做すことができる。溪母字(図3参照)と微母字(図4参照)は類似しているけれども、『常熟博物館蔵印集』の当該部分は確かに微母字(図6参照)である。



図1 『隋唐以来官印集存』



図2 『常熟博物館蔵印集』



図3 『蒙古字韻』の溪母字



図4 『蒙古字韻』の微母字



図5 『隋唐以来官印集存』中の微母字



図6 『常熟博物館蔵印集』中の微母字

【参考文献（発行年順）】

羅振玉(1916)『隋唐以来官印集存』民国五年。

照那斯圖(1977)「元八思巴字篆書官印輯存」『文物資料叢刊 I』北京:文物出版社。

照那斯圖(1980)「八思巴字篆体字母研究」『中国語文』1980年第4期,307-309,269頁。

錢 浚(1997)『常熟博物館蔵印集』北京:人民美術出版社。

*本稿は平成25年・平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25370488「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。